

中心発問とは何か？

後藤 忠

今までも定義が曖昧だったこの中心発問だが、近年の道徳授業の乱れと相まって、「明らかに間違っただ定義で指導しているのではないか」と懸念される授業が気になって仕方がない。そこで改めて私見を申し述べ、ご批正を賜りたい。

なお、「授業のねらい」が道徳科の目標（つまり、道徳性；道徳的心情、判断力、実践意欲及び態度の育成）から明らかに逸脱している授業の発問についてはこの話題にしない。

学習指導要領解説 特別の教科道徳編 84pp に 発問構成について次のような記述がある。

発問を構成する場合、**授業のねらい**に深く関わる**中心的な発問**を先ず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするするという手順が有効な場合が多い。

このことから、授業のねらいに直接(ダイレクトに)迫る発問のことを中心発問とすることができる。したがって、中心発問は「本時の主題」と密接に関係していると言える。

本時の主題とは、授業者が何を本時の**ねらい**とし、それを達成するためにどんな**教材**を使い、それをどう活用するかのとまりを示すものである。したがって、まず本時のねらいを先に定め、次にそのねらいを達成するための**教材**を選択するという手順を踏むことが筋である。

例えば、「身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする気持ちを育てる」というねらいを立て、「はしの上のおおかみ」を使って授業を行う場合、「小動物達に親切にしたおおかみが、前よりずっといい気持ちになる」ところが中心発問となるところで、熊の後ろ姿をいつまでも見送っているところは中心発問ではないと考える。なぜならば、熊の後ろ姿をいつまでも見送っているおおかみの内面には、確かに「熊さん、かっこいいな。僕も真似したいな。」という気持ちはあると思うが、一方で「うさぎに悪いことをしたな。きつねにすまなかったな。」という反省、後悔の気持ちもあるだろう。それではダイレクトに本時のねらいに迫っていることにはならない。

「くずれ落ちた段ボール箱」を使って「誰に対しても思いやりの心を持ち、困っている人の立場に立って親切にしようとする態度を育てる」というねらいで行う授業では、足取り軽く教室に向かう主人公の内面を追求するところが中心発問であって、おばあさんにお礼を言われて「いいえ、いいんです…」と答えるところではない。その場面の主人公の内面を深く追求しても、主人公のモヤモヤとした割り切れない気持ちが多面的に出てくるが、本時のねらいとは程遠い。

とは言え、「熊の後ろ姿をいつまでも見ている」ところや、「いいえ、いいんです…」のところは、授業構成上とても重要なところである。したがって、それらは中心発問を支える重要な**基本発問**として位置付けるのが妥当であると考えられる。

いずれにしても、児童から多様な意見や考えが表出されるような発問は中心発問とは言えない。本時のねらいに迫る発問ではないからである。中心発問というのは、むしろ単一の価値が（同じような意見や考えが）深く表出される発問であると言える。

結論として、「授業のねらいに基づき、そのねらいを達成するのにふさわしい教材を選択する」という

手順を踏むのが大切であると同時に、同じ教材を使って授業のねらいを変える、つまり中心発問が変わるといふ考え方は、私には理解できない。(そのイメージが浮かばない)

中心発問とは何か ― ねらいとする価値に迫る問いの在り方 ―

AU氏

私も、後藤先生の言われる通り、中心発問は単に多様な意見を引き出すための発問ではないと考えています。道徳科授業における中心発問とは、児童の思考をねらいとする価値に焦点化し、その意味について深く考えさせるための問いであると捉えています。

児童から様々な意見がばらばらに出されるだけでは、本時のねらいとしている価値に迫ることは難しくなります。中心発問は、児童の思考を一つの価値へと向け、その意味を深く掘り下げていくための要となる発問であるべきです。

もちろん、児童の多様な考えを引き出すことは、道徳科授業においてとても大切なことです。

しかし、その多様な考えも、ねらいとする価値との関わりの中で語られるときにこそ、道徳科授業の学びは深まっていくのではないのでしょうか。

いわゆる「葛藤場面」で発問を行い、様々な答えが出て教師が対応に戸惑ってしまう授業や、出てきた答えを板書しているだけの授業を目にすることもあります。それでは、道徳科授業の主題やねらいとする価値に十分迫ることは難しいでしょう。

例えば教材「絵葉書と切手」では、主人公が料金不足のことを友達に知らせるかどうか迷っている場面ではなく、悩んだ末に友達へ手紙を書いている場面が中心発問にふさわしいと思います。そこには、主人公が友達のことを思って行動しようとしている姿が具体的に表れているからです。

また教材「手品師」においても、大劇場へ行くかどうか悩んでいる場面ではなく、少年の前で手品を演じている場面こそが中心発問に適した場面であると考えます。そこには、自分の心に誠実に生きようとする主人公の思いが、実際の行動として表れているからです。

このように、中心発問は必ずしも「葛藤場面」に置かれるとは限りません。むしろ、主人公が価値を実現しようとしている場面や、その価値の意味が具体的に表れている場面に着目することによって、児童はその価値の意味をより深く考えることができるのではないかと推察します。

中心発問によって引き出される児童の考えは、方向としては同じ価値に向かいながらも、その理由や意味の捉え方が多様に語られることが望ましい姿ではないのでしょうか。

児童の発言は一見似ているように見えても、その背景にある理由や思いは様々です。中心発問によってその違いが表れ、ねらいとする価値を多面的・多角的に理解していく学びが生まれるようにしていくことが大切です。

道徳科授業において重要なのは、価値をめぐる意見を分散させることではなく、価値の意味を深く考える学びをつくることです。その学びを生み出す要となる問いこそが、中心発問と言えるでしょう。

したがって中心発問とは、本時のねらいとする価値に児童の思考を焦点化し、その価値の意味を多面的・多角的に問い続ける学びを生み出す問いであると考えます。

<前略>

さて、貴兄の中心発問についての定義は私も同感です。

ただ、定義が具体的になってくるとそこに微妙な違いも感じてきますので、今回はそれを申し述べます。貴兄が例示した2つは、いずれも葛藤場面ですので、これは中心発問にはなりません。

しかし、私が今回問題にしたいのは、先に例示した「はしの上のおおかみ」や「くずれ落ちた段ボール箱」での中心発問についてです。このことについてはいかがでしょうか？

中心発問場面を鮮明にするために、私は抽象的な本時のねらいを教材に合わせて具体的に翻訳することを指導しています。例えば、「身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする気持ちを育てる」というねらいでは、「(おおかみが)小動物達に意地悪をするより、優しくする方がずっといい気分になるなあ。親切にするって本当に気持ちがいいな」のように。このように、ねらいを教材に合わせて翻訳するとねらいに直接迫る中心発問場面が具体的に見えてきます。「くずれ落ちた段ボール箱」も同様です。

なお、以下は本題とは全く関係のない余談ですのでさりと読み流してください。

私は何十年も「手品師」の中心発問場面は少年の前で手品を演じている場面だと思ってきましたが、最近手品師が友人に「せっかくだけど明日は行けない」と言うところではないかと思っています。なぜならば、最後の場面にはねらいとは異なる多様な思い(親切, 思いやり, 規則の尊重など)が混在しており、ダイレクトにねらいとする価値に迫ることができないからです。

後藤先生からの質問に答えて

AU氏 2026年3月17日

① 「はしの上のおおかみ」の場合

「身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする気持ちを育てる」というねらいで授業を行うのであれば、私も「小動物たちに親切にしたおおかみが、前よりずっといい気持ちになる」場面が中心発問になるのではないかと考えます。

その理由は、そこに主人公であるおおかみが小動物たちのことを思い、親切にしようとしている気持ちが具体的に表れているからです。この場面では児童の考えが同じ価値に向かいながらも、その理由や意味の捉え方について多様に語られることが期待できると考えます。

② 「くずれ落ちた段ボール箱」の場合

「誰に対しても思いやりの心もち、困っている人の立場に立って親切にしようとする態度を育てる」というねらいで授業を実施するのであれば、私も「足取り軽く教室に向かう主人公の内面を追求する」場面が中心発問になると考えます。理由は「はしの上のおおかみ」と同様です。

ただし、ねらいによって中心発問の位置は変わり得るのではないのでしょうか。ねらいを「親切にしようとする態度」に置く場合には、主人公の行動の意味を捉えるこの場面が適切だと思いますが、ねらいを「心情」に重点を置く場合には、「校長先生が手紙を読んでいるときの気持ち」を問う中心発問によ

って授業を実施することも、考えられると思います。

③ 「手品師」の場合

これまで私は、「手品師」の中心発問は少年の前で手品を演じている場面であると考えてきました。

しかし、手品師が友人に「せっかくだけど明日は行けない」と伝える場面の方が、中心発問として適しているのではないかと、今回初めて気づきました。

というのも、最後の場面で「誠実」という価値に迫ろうとすると、「自分に正直に行動すること」や「すがすがしい気持ちで手品を演じること」といった内面的な意味を児童が捉えることは、高学年であってもやや難しい面があるように思うからです。

その点、友人に断りを伝える場面の方が、誠実さの意味や価値をより具体的に考えやすいのではないかと感じました。

いずれにしても、道徳科授業の中心発問は葛藤場面に置くとすぐ考えてしまうのではなく、ねらいをよく吟味し、ねらいとする価値が具体的な行為や心の動きとして現れている場面においてこそ、価値を深めるという働きをもつのではないかと考えています。

後藤先生のお考えをお聞かせいただければ幸いです。ご指導よろしく願いいたします。

②についての私の考え

後藤 忠

教材によっては、希に中心発問候補場面が複数ある教材があります。

例えば、「友の肖像画」です。「正一の作品を鑑賞している場面（「和也くん、いつまでも友達でいようね」と語りかけてくるようだったの場面）」、「帰りの電車の中でじっと目をつむっている場面」、「電車の窓から見える空は青く透き通っていた場面」。これらはどれを選んでもドンピシャの中心発問場面だと私は思います。

「くずれ落ちた段ボール箱」もその類いで、どちらを選んでも間違いではないのではないのでしょうか。

中心発問についての考え方

TH氏

「中心発問とはねらいとする道徳的価値に迫る発問を言う」

語る会に入会した時期に元文部省視学官青木孝頼先生からこう指導を受けました。以後、常に、中心発問は何か等について研修を重ねてきました。後藤先生からのご指摘をいただき、改めて考えてみました。

先生ご指摘の「それではダイレクトに本時のねらいに迫っていることにはならない」は、まさに同感です。様々なとらえ方がされているようですが、やはり大切なことは『授業のねらいに深く関わる中心的な発問を先ず考える』ことです。

以下、青木先生が亡くなられた時に、先生のお教えをまとめておこうということで『道徳・特別活動の本質』を図書としてまとめたものの中で“中心発問”の項がありましたので参考までに添付しました。

1 一人一人の価値観を引き出す中心発問の工夫

道徳授業の展開前段では、教材を通しての価値の追求・把握のための話し合いが行われる。その際、教材を共感的に活用することが多いが、中心発問をどこに置くかが授業の成否に大きく影響する。中心発問をどうするかについてはいくつかの考え方があるが、大きく二つに分けることができる。

第1は、教材の後半で主人公がねらいとする価値を目指し、充実感に浸ったり、後悔したりする場面である。例えば「手品師」で「大劇場の出演を断り、男の子の前で手品をする手品師はどんな気持ちか」を中心発問にした場合、教材の中での確かな価値把握ができ、授業者も考えさせたい内容を明確に伝えることができる。

主人公に共感させ、その満足感や充実感を考えさせる中心発問は、価値把握を容易にするというよさがある。一方で子供の反応が個人の価値観を反映したものではなく、教材の内容から考えたものになりがちであるという問題がある。

第2は、子供一人一人の価値観が反映され、発言が最もよく出る場面を中心発問にする場合である。いわゆる教材中の主人公が葛藤する場面である。よく「本音を引き出す」ということが言われるが、道徳の時間では、主人公に託して出された個々の価値観を「本音」とすることが考えられる。

「手品師」では、「友人からの大劇場への出演を依頼されたとき、手品師はどんなことを考えたか」の発問をした場合、子どもは「一人ぼっちの男の子との約束を守るか」「友人からの大劇場への出演の依頼を引き受けるか」と葛藤する主人公に共感する中で、自分なりの「本音」とすることが考えられる。

このように「迷っている主人公はどんなことを考えているだろうか」「主人公はどんな気持ち一人の客の前で手品を演じているのだろうか」などを中心発問にすることにより、主人公の考えや気持ちに託して自己の価値観を反映した意見を自由に話すことができ、授業者も子どもの価値観を広い窓口で受け止め、授業も活性化する。

* なお、この中心発問という言葉ですが、旧指導書や解説など文科省・文部省発行のものには、私的研究会等における用語等は使用できないと言うことで**中心的な発問**、**基本的な発問**と言い換えています。

感 謝

後藤 忠

貴重な情報をありがとうございました。あの頃から50年が経ちましたが、改めて考えましてもやはり**第2**は中心発問にはなり得ないと思います。

しかし、未だに葛藤場面を中心発問にしている授業が多く存在する根拠をこの度初めて知った思いです。本当にありがとうございました。

後藤先生のご意見を拝読して

YS 氏

中心発問に関するご意見を読ませていただきました。至極もったいなことだと思えます。

一カ所だけ気になったのが、「児童から多様な意見や考えが表出される発問は中心発問とはいえない」という表現です。後藤先生は子どもたちから多様な意見が多く出される場所（盛り上がる場所）ではな

いということをおっしゃりたいのだと思います。それは私も同感です。

しかし、中心発問でも、子どもたちはその子なりの表現で様々な意見を述べてきます。そのレベルも様々です。同じねらいに関することでも発言内容の深さは異なり、それを出し合うことでねらいに迫っていきます。

先生の表現のままですと、「決まり切った一つの正解がでるところが中心発問である」と誤解されてしまう危険性があると感じました。

したがって、「本時のねらいとは関係のない意見や考えが児童からたくさん表出される（ことを求める）発問は中心発問にはふさわしくない」としてはどうでしょうか。

感 謝

後藤 忠

おっしゃる通りです。早速修正させていただきます。どうもありがとうございました。